

會津八一記念博物館所蔵の刀子形石製模造品に関する 基礎的研究

石 井 友 菜

はじめに

會津八一記念博物館収蔵の考古資料は、早稲田大学やその関係者による発掘調査で出土した遺物を核とし、大学に縁のある寄贈者より頂いたコレクション資料などを含めると、その総量は膨大な数に上る。資料の多くは考古学研究室や博物館による整理が進められ、報告書の発刊や博物館展示を通じて公開されてきた。しかし、大学の長い歴史の中で資料の度重なる移管が行われ、その結果として収蔵に至る来歴が現在まで伝えられていない資料、またこれまで公開されてこなかった資料も存在する。その一つに、本稿で紹介する刀子形石製模造品が挙げられる。

石製模造品とは、滑石などの軟質な石材を用いて刀子・斧・鎌などの農工具や酒造具・機織具、あるいは剣や勾玉などの器物をかたどったものの総称である。古墳には農工具類が副葬されることが多く、集落遺跡からは有孔円板、剣形などが主に出土する。本稿で紹介する刀子形は主に古墳から出土し、石製模造品の中でも確認例が多い器種である。古墳時代の中でも中期に盛行し、当該期の古墳文化を表象する器物として多く取り上げられてきた。

會津八一記念博物館の収蔵品の中には、2020年現在で4点の刀子形石製模造品の存在を確認している^(註1)。3点は「旧7号館考古学研究室」の収蔵資料群に、残る1点は「原祐三コレクション」に含まれる資料である。これらは既往研究の集成でも取り上げられたことはなく(河野 1999、第54回埋蔵文化財研究集会事務局編 2005)、過去の学内発行物においても殆ど報告のない資料である。

結論を先に記せば、出土コンテキストをはじめ本稿報告資料に関する全ての情報を明確にはし得ない。しかし、1点でも多くの所蔵資料について持ちうる限りの情報を明らかにし、図化・公開する必要があると考える。そこで、本稿では当該資料について現時点で判明している情報を記載するとともに、刀子形の図化を行い、観察所見を記載する。さらに既往研究を参照し、本稿報告資料の年代的位置づけや製作状況を検討した上で、現在の刀子形石製模造品研究の課題を探る。

1. 資料の来歴

本稿報告資料の報告に入る前に、現時点で判明している資料の来歴を記載する。

旧7号館考古学研究室 かつて早稲田大学の7号館3階に考古学研究室が存在し、古墳時代の資料、古代寺院の瓦、沖繩・八重山の民俗資料など、滝口宏教授の調査関係資料を主に収蔵していた。滝口宏教授の逝去後、1993年頃に研究室の立ち退きに伴い資料が移動され、現在は早稲田大学の考古学調査資料として會津八一記念博物館に収蔵されている。この中にある、玉類などを一括して納めたケース内に3点の刀子形石製模造品が含まれている(本稿報告 No.1~3)。ケース内には「首飾り 中心の三個の勾玉は翡翠、他はガラス製の小玉 宮崎県出土」と記載されたメモが付属している。しかし資料移動時の写真、および現在のケース内の双方ともに翡翠製の勾玉は確認されず、またガラス玉以外にも碧玉・緑色凝灰岩製の管玉や勾玉、耳環などが含まれている。このようにメモと実際

にケースに含まれる資料が一致しないことから、メモが記された当時のセットを留めていないと推測される。早稲田大学では1948・1950年に日向考古調査団によって宮崎県の古墳・古代遺跡の調査を行っており、この際に付近の遺跡から採集した可能性も考えられなくはないが、筆者の管見の限り宮崎県をはじめ九州地域では古墳からの刀子形石製模造品の出土は希薄である。現状の刀子形石製模造品の出土傾向、メモと実際の資料の不一致からは、これらの資料が宮崎県出土である可能性は低く、出土地を明らかにはし得ない。

原祐三コレクション 元早稲田大学社会科学部の原祐三教授によって本学に寄贈された考古資料である。原教授の大学退職後、菊池徹夫教授・高橋龍三郎教授が長野県飯田市にある原氏のご実家に受けとりに向かったとのことで、現在會津八一記念博物館ではテン箱数で43を数える資料を収蔵している。内容は縄文土器、打製石斧などが多くを占めるが、その中に玉類など古墳時代に属すると思しき資料を中心にまとめたケースが存在し（**図1**）、この中に刀子形石製模造品が1点含まれる（本稿報告 No.4）。

原氏の著書『私の随筆集－かねもちの心がけ』中の「私の収集癖（コレクト・マニア）－道に大いに遺を拾う－」という章には、小学校から旧制中学校の2、3年にかけて氏が考古資料の収集に打ち込んだ旨が記述されている（原 1969）。収集対象とした地域については、氏のご実家の近所を中心とし「遠く他村の畑の端や桑畑の中」や「よその村」に「遠走りして」収集に向かったという記載がある。寄贈資料に伴う採集地のメモ書きにも「上郷村」の地名が多くみられ、飯田市を中心とした地域で収集されたものと推測される（註2）。

前掲書に掲載された図（「◎収集石器土器の一部」）中、「石鏃・磨製有孔石鏃・玉類・副葬模造品」というキャプションとともに掲載された写真の右端に本稿紹介の刀子形が写る（**図2**）。このほか原氏の著書には古墳時代の遺跡や資料に言及した文章があり、以下に引用する。

「故郷の生家は、縄文時代の遺跡らしい段丘の上に、小さな円形古墳が点々とならんでいた土地を開墾して、宅地にしたものであった。まだ掘り起されない古墳で、小さな祠をのせて、塚とか氏神と呼ばれているものが二三残っていた。しかしこれらのことも、最初からわかっていたのではなく、私たちの収集品をみて、考古学者や、郷土史家が、後から判定したことである」（原 1969、p.295 2-5）

「一連の勾玉や管玉切子玉の類は、むかし早大の考古学教授だった西村真次先生が、早大で買いたいが、かねがないから、寄附しないか、と行ってこられた手紙と一緒に箱に納めてある」（原 1969、p.300 8-9）

以上の記載は、前者が原氏のご実家付近にある古墳からも採集を行っていたことを示すもので、後者は早稲田大学との関わり、寄贈に至るきっかけを示すものである。

寄贈に立ち会った高橋龍三郎教授のご教示によると、原氏より「化石（ばけいし）」の古墳から出土したのとして水晶玉などを受け取ったとのことで、**図1**のケースに含まれる一連の玉類に含まれる水晶製棗玉・碧玉製管玉などがこれに該当するものと推測される（註3）。ただし、ビニール紐で連結された玉類には滑石製の勾玉、現代のものと思われるビーズ玉なども含まれる。また、原氏の著書にみえる遺物と**図1**のケース内の資料は一致せず、著



図1 原祐三コレクションに含まれる玉類などの資料

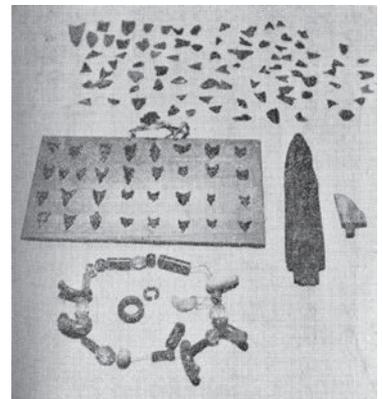


図2 原氏の著書に掲載された本稿報告資料（図中央右端）

書にみえる石器類の代わりに銅鏡・石製品などが加わっている。

長野県飯田市上郷化石には「化石遺跡」、「化石1号墳」などの存在が知られている。『下伊那史』2巻に記載がみられるほか（下伊那誌編纂会 1955）、2015年には発掘調査報告が刊行されており、その詳細を知ることができる（飯田市教育委員会 2015）。これらを参照すると、化石1号墳は直径約20mの円墳で横穴式石室を有し、6世紀末～7世紀代に属する古墳である。現在古墳上には石碑が立っており、原氏が著書に記載している古墳はこれに当たると考えられる。しかし、石製模造品の中でも刀子形が主に副葬される5世紀代とは時期がずれており、これらの古墳に刀子形が帰属する可能性は低い。ただし、天竜川の流域は5世紀～6世紀末にかけて飯田古墳群と呼ばれる大規模な古墳群が形成され、とくに上郷地区は1つの単位群（上郷単位群）を形成する古墳集中地域である。「化石」の近くにも短甲が出土した溝口の塚古墳などの前方後円墳や、馬埋葬土壙が確認された宮垣外遺跡など、5世紀代後半に位置づけられる遺跡が多く確認されている。本稿報告資料は、飯田市内のこうした5世紀代の遺跡に帰属する可能性が考えられる^(註4)。

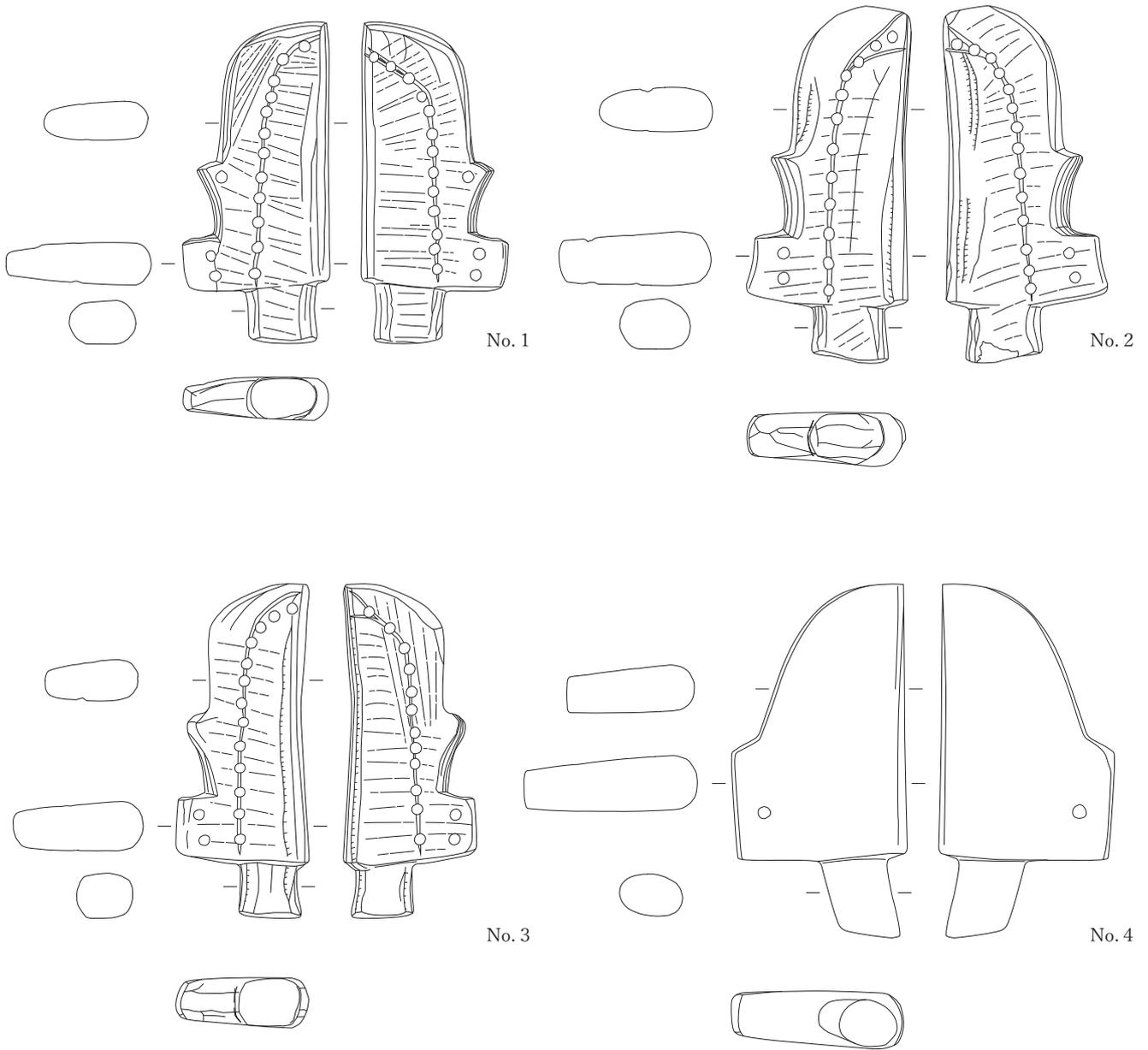
2. 資料の図化・観察

會津八一記念博物館所蔵の刀子形石製模造品の実測図・写真を図3に示した。以下、各資料の観察所見を述べる。また、加工痕については後の章で詳述する。なお本稿では便宜的に、鞘部刃側が左にくるように配置した際に見える面を表面とする。

No.1（旧7号館考古学研究室） 石材は暗緑灰色で光沢の強い滑石で、重量は13gである。鞘部背面側は直線を呈し、把部と鞘部の間には細い刻線によって境界を表現している。把部は短く扁平で、側面は角張り稜線が目立つ。把頭に瘤状・抉り表現などは設けられない。把部は根本から一定の幅を保ったまま把頭に至る。鞘部は背側に丸みを持ち、刃側に至るまでほぼ厚みは変わらない。刃側に方形の突出部を設け、その上部に突起状表現がつく。この突起部に1点、方形突出部に2点の孔が設けられており、突出部のものは孔が裏面まで貫通している。縫い目表現として両面ともに列点文が設けられており、表面で12点、裏面で13点を数える。これらの列点文をつなぐように、細い刻線が設けられている。刻線は裏面のみ、鞘尻部で二又に分かれる。表面には細かい擦痕が目立つ。

No.2（旧7号館考古学研究室） 石材は暗緑灰色で光沢の強い滑石で、重量は19gである。鞘部背面側は直線的で、把部と鞘部の間にはつながっており、No.1のような刻線は設けられない。把部は短く扁平でやや角ばっている。把頭に瘤状・抉り表現などは設けられない。把部は根本から一定の幅を保ったまま把頭に至る。鞘部は背側に丸みを持ち、刃側に至るまでほぼ厚みは変わらない。刃側に方形突出部を設け、その上部に突起状表現がつく。方形突出部に2点の孔が設けられており、裏面まで貫通している。No.1と異なり、突起部に孔はつかない。縫い目表現として両面ともに列点文が設けられており、表面で12点、裏面で14点を数える。孔をつなぐように細い刻線が設けられている。No.1と異なり、本資料は両面とも刻線が鞘尻部で二又に分かれる。表面には細かい擦痕が目立つ。

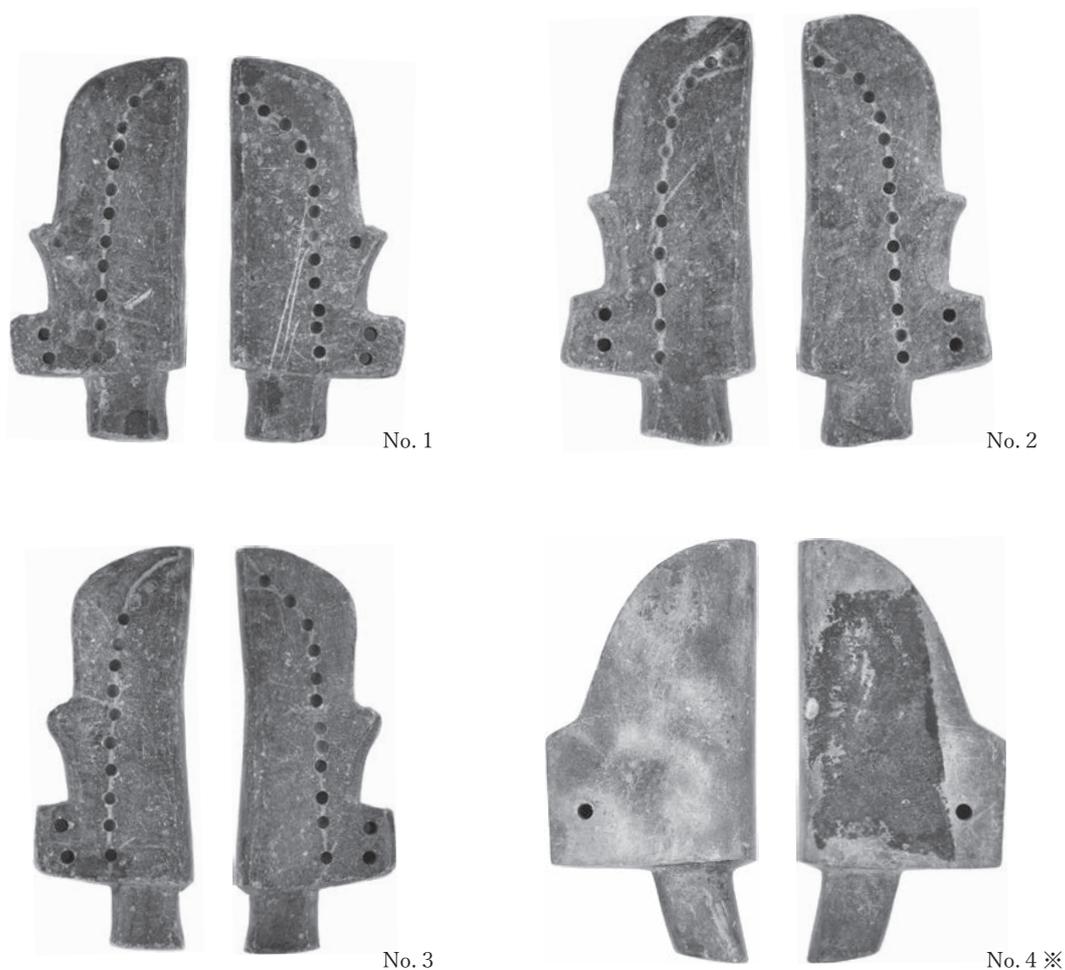
No.3（旧7号館考古学研究室） 石材は暗緑灰色で光沢の強い滑石で、重量は14gである。鞘部背面側は中央部にやや窪みをもつが全体的に直線状を呈し、把部と鞘部の間は段差がつけられている。把部は短く扁平でやや角ばっている。把頭に瘤状・抉り表現などは設けられない。把部は根本から一定の幅を保ったまま把頭に至る。鞘部は背側に丸みを持ち、刃側に至るまでほぼ厚みは変わらない。刃側に方形突出部を設け、その上部に突起状表現がつく。突出部に2点の孔が設けられており、裏面まで貫通している。突起部に孔はつかない。縫い目表現として両面ともに列点文が設けられており、表面で13点、裏面で12点を数える。孔をつなぐように細い刻線が設けられている。本資料は裏面のみ鞘尻部で二又に分かれる。表面には細かい擦痕が目立つ。



No.1～No.3 旧7号館考古学研究室 No.4 原祐三コレクション

図3-1 會津八一記念博物館所蔵刀子形石製模造品の実測図

No.4 (原祐三コレクション) 石材は黄褐色で光沢の弱い滑石で、重量は19gである。鞘部背面側は直線的で、把部と鞘部の間には明瞭な段差によって区別されている。把部は上記3点より長く丸みの強い造形である。把頭に瘤状・抉り表現などは設けられず、背側に向かって反りをもつ。幅広の鞘部を有し、背側は丸みもち、刃側に向かって直線的な傾斜がつき、わずかに厚みを減じる。刃側に方形突出部を設け、鞘部に装飾はもたない。方形突出部の下部に孔が一点設けられており、裏面まで貫通している。縫い目表現はもたず、表面には擦痕がほとんど確認されない。



No.1～No.3 旧7号館考古学研究室 No.4 原祐三コレクション
※No.4の裏側にはシールの付着による汚れが全面に残る。

図3-2 會津八一記念博物館所蔵刀子形石製模造品の写真

3. 形態・加工痕の分類に基づく年代的位置づけの考察

刀子形石製模造品に関する既往研究は、確認例の多さなどから石製模造品の中でも多くの論考が存在し、型式・編年研究の蓄積も豊富である。前述の観察所見をもとに、既往研究を参照しながら本稿報告資料の年代的位置付けを試みる。

3-1. 形態の検討

刀子形石製模造品の形態分類 石製模造品の型式・編年研究には大きく分けて、刀子形の形態を分類基軸とする（杉山 1985、河野 2003 ほか）ものと、器種のセット関係とその変遷をもとに論じる（白石 1985）ものがある。本稿の対象は器種が刀子形に限られ、また出土コンテクストが不明で本来のセット関係を留めていない可能性がある為、前者の形態分類による研究を主に参照する。

杉山晋作は広域の古墳間に共通してみられる刀子各部位の形態の変遷を、模倣の手本となった本来の刀子そのも

のの変遷と捉える。これに基づいて、把と鞘の平面形態の表現法に着目し、主には把部の長さや把頭の瘤状・抉り表現の有無などを指標として全体をⅣ期に分類している（杉山 1985）。河野一隆は刀子形石製模造品が様（型紙）のようなモデルの輪郭を素材に写して作成されたものと考え^{（註5）}、細部形態の消長を時間的変化とみなし、把部・鞘部の形状をもとに全体をⅣ期に分類する（河野 1999・2002・2003）。このように把部および鞘部の平面形態をもとにした分類は多くの研究者に通有の分析手法であり、北山峰生らはこの分析手法を用いて広範囲の古墳出土資料を比較し、特徴的な形態を抽出することで古墳間の関係性を論じている（北山 2003、中川 2002、田中 2007、佐久間 2011ほか）。中川敬太はさらに、列点文や格子状線刻などの鞘部に設けられた装飾をもとに、石製模造品の製作集団の新古、系統の違いを明らかにしている（中川 2002）。上記の論考を参照し、①平面形態、②装飾の2点に着目して刀子形石製模造品の年代的位置付けを検討する。

①**平面形態** No.1～No.3についてはいずれも短く扁平な把部、鞘部に設けられた突起表現より、杉山編年における第Ⅲ期のうち把頭に抉りは入らないものに分類される。河野編年では鞘部（2）突起表現に分類され、これらはⅢ・Ⅳ期に盛行するものとされる。一方、No.4については上記の研究と照合すると鞘部・把部に特徴をもたず、分類が困難である。消極的ながら、初期の大型の刀子形とは異なり、かつ把部の比較的長い形態から No.1～No.3に先行するものとして杉山編年第Ⅱ期に分類しておく。

②**装飾** No.1～No.3については、鞘部に列点文と刻線が組み合わせられた装飾をもつ。列点文のみ、刻線のみ資料については類例は多いが、両者を合わせ持つ資料は数量に限られる。具体例としては茨城県常陸鏡塚古墳・奈良県室宮山古墳・静岡県各和金塚古墳・東京都野毛大塚古墳などが挙げられ、初期に位置付けられる大型のものから小型化・粗雑化したものまで多様で、特定の年代に絞るのは困難である。ただし、把部の扁平な形状やサイズの類似性なども鑑みると、後者2例が本稿報告資料に近いものとする。なお No.1～No.3は、片面あるいは両面の鞘尻部先端で二又に刻線が分かれているという特殊な例である。また No.4については装飾をもたず、方形突出部に孔を1点持つのみで、分類が困難である。

3-2. 加工痕の検討

刀子形石製模造品の研究において近年特に着目されているのは、遺物表面に残る製作時に付けられたと思しき加工痕への着目である。刀子形石製模造品の製作技術については概ね精から粗へという変遷観が前提とされてきたが、これを詳細な加工痕の分類を通じて分析したのが佐久間正明の研究である（佐久間 2009）。佐久間はさらに、形態や石材、製作技術を示す加工痕の3つの分類に基づき、製作工人を抽出する方法論を提示した（佐久間 2011）。

本稿報告資料について、鞘尻部・鞘部・把部に分けて加工痕を撮影したものが図4である^{（註6）}。No.1～No.3については鞘部・把部の側面に稜線を残す削り痕が明瞭に確認され

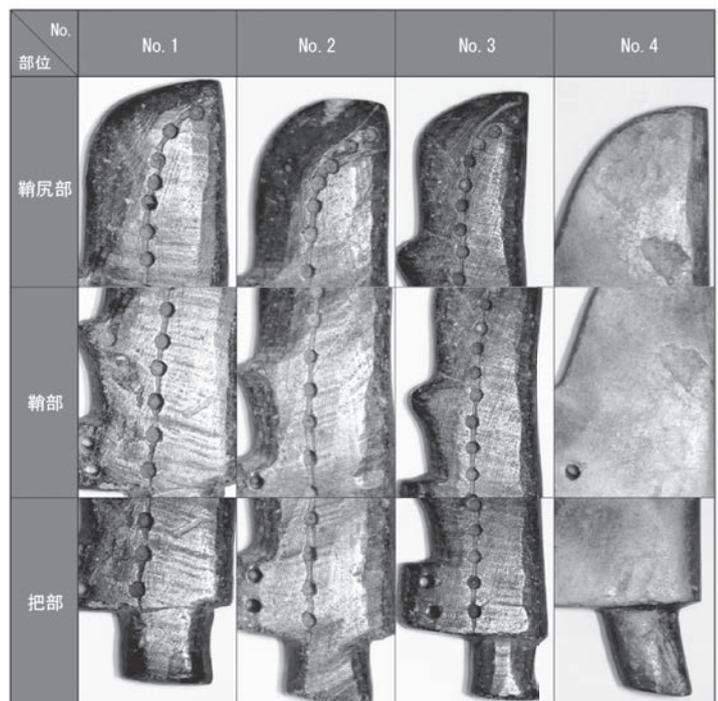


図4 遺物表面に残る加工痕

る。鞘部・把部の平坦面には横方向に走る太い擦痕が、その上からより細かい擦痕が縦方向に施される。稜線を残す削り痕については 佐久間 2009 における削り痕 a、太い擦痕については擦痕 a あるいは b に該当すると推測される。一方、No.4は鞘部背側に稜線を残す削り痕 a が確認されるほかは、鞘部平坦面に殆ど擦痕が確認されず、把部にも殆ど稜線が残らない。No.1～No.3に比べると、No.4の方が丁寧な成形がなされたと考えられる。

3-3. 年代的な位置づけの考察

以上、館内収蔵の刀子形石製模造品がどのような分類がなされるか、既往研究との照合を行った。上記で参照したように、刀子形は主に鞘部・方形突出部・把部の表現に分類の軸を置いている。よって、この部分に特徴がない資料については、出土状況や共伴副葬品が明らかでない限り、詳細な年代的な位置付けや出土地の推定等は難しい現状がある。No.1～No.3については、いずれも小型であること、扁平・簡素な形態であること、荒い加工痕が残るといった特徴から 河野 2003 におけるⅢ・Ⅳ期、凡そ5世紀後半代の位置付けが妥当と考える。一方、No.4については形態的特徴に乏しく年代的な位置づけは難しい。あえて言及するならば、杉山編年Ⅲ・Ⅳ期や河野編年Ⅲ・Ⅳ期の代表的な古墳には少ない、円筒に近く反りをもつ把部の成形、比較的把の長い形態、加工痕を殆ど残さない丁寧な成形から、No.1～No.3より若干先行した年代が推測される。

4. 刀子形石製模造品の製作状況に関する一考察

最後に、No.1～No.3から刀子形石製模造品の製作状況について若干の考察を加え、本稿を閉じたい。

No.1～No.3は同形のを多数製作するという、所謂「同種多量」副葬の一端を示している。これらの厚みは6.5～7.8mmと近似しており、既往研究で指摘されているようにプレート状に石材自体が揃えられ（北山 2002 ほか）、そこから刀子や砥石などの工具で刀子形の形態を作り出したものと推測される。さらに 佐久間 2011 の方法論に則れば、形態・加工痕・石材の共通性から、No.1～No.3の3点の資料は同一の工人に製作されたものと推測される。

石製模造品の形態の作出にあたって、河野 2002 では「様」による伝達、清喜 1994・1998 では「雛形」の存在あるいは「割付」の工程を想定する。これらの論考はいずれも複数の資料間で形態に共通性がみられる理由を検討したものであるが、大まかな形態については共通していても、細かな部分を見ると個体差がみられる例も多い。刀子形の形態のうち、どの部分に共通性が高く、どの部分に差異が目立つかという情報は、製作者が刀子形の作出において行った、形態に関する情報の取捨選択を推測できると考える。それでは、No.1～No.3にはどのような共通性がみられ、どのような差異が認められるのか、以下に検討を加える。

図5はNo.1～No.3の輪郭を、特定の箇所を基点に重ね合わせたものである。左から突起部、把部下端、鞘部刃側を基点とした。順に見ていくと、突起部を基点とした際は突起部～方形突出部上端までの形状がほぼ一致する。次に、把部下端を基点とした際は把部の長さが近似している。最後に鞘部刃側を基点とすると、鞘部先端～方形突出部までに一致度が高い。以上より、これら3点の刀子形が刃部～突起状表現～突出部上端までの形状と、把部の長さにおいて共通性が高いことが分かる。一方で、突起部や刃側を基点としたときには方形突出部下端～把部分に差異が目立ち、鞘部横幅などもやや差異が目立つ。以上より No.1～No.3の作成にあたっては刃部の形状・突起部・把部の長さを揃えることが意識され、その他の部分については製作時の状況に応じて可変的であったと考えられる。さらに、鞘部刃側を基点としたときの縫い目表現の位置関係を図5下段において比較した。この図より、形態と装飾の位置関係がセットになっていることが分かる。以上より、様、雛形の使用あるいは割り付けの工程があったと仮定すると、本稿報告資料に関しては刃部～突起状表現～突出部上端までの形状、把部の長さ、装飾の位置と

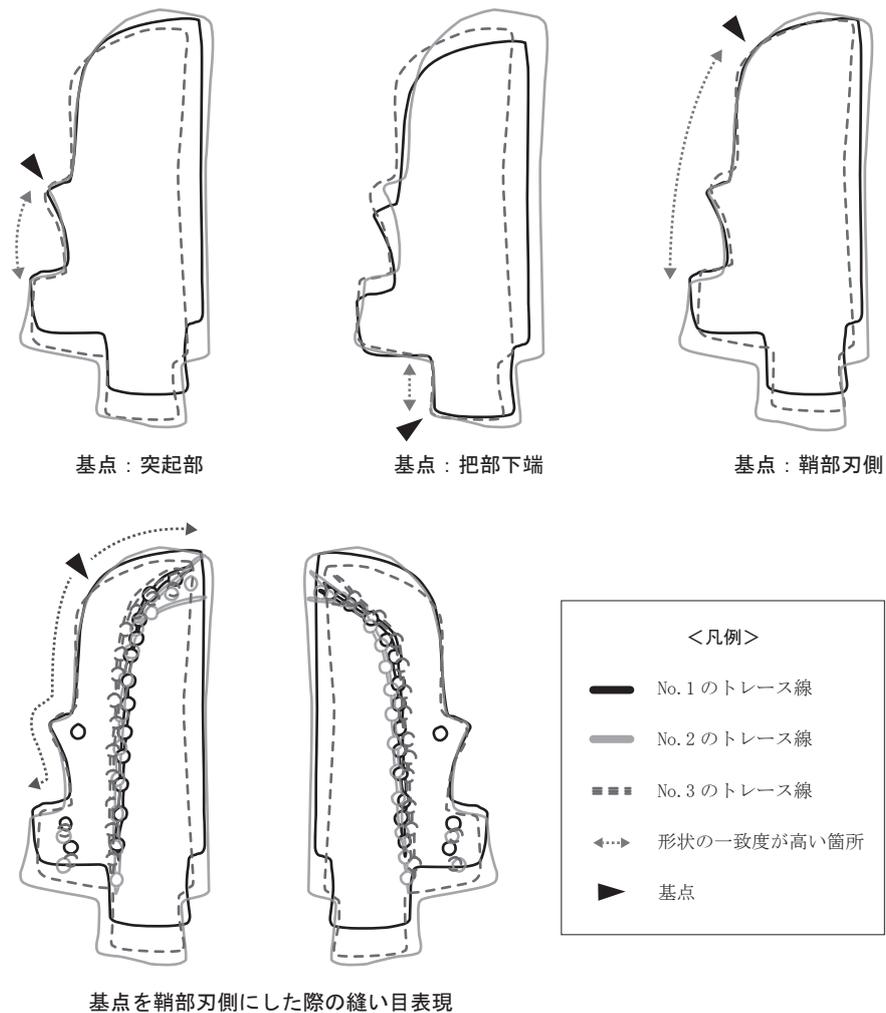


図5 刀子形の形態比較

いった属性を共通させることが重視されたと考えられる。

一方、列点文の点数・突起部の点・刻線の鞘尻部における表現・鞘部－把部の境界（段差）の作出の有無には個体間の差異が認められる。これらの部分は前記の属性ほどには重視されず、石材サイズ等の制約をうけて変更されたか、あるいは作出工程の省略などが行われたものと考えられる。

おわりに

以上、會津八一記念博物館所蔵の刀子形石製模造品の図化・紹介を行うとともに、既往研究を参照しながら当資料群の年代的位置付け、および製作状況について考察した。本稿で参照した通り、石製模造品の中でも刀子形には多くの研究が蓄積されており、型式・編年研究も豊富である。その中で、No.4のような簡素な形態の位置付けには未だ難があるという課題もみられた。また、鎌形や斧形などの他器種の形態から中期でも新相に位置付けられた古墳について、刀子形の分類をもとにした編年研究では年代が遡及するなど、器種間での年代的位置づけに揺らぎが生じている現状がある。現在の研究において必要とされているのは、器種ごとの詳細な型式・編年研究に基づいた石製模造品総体での動向の再検討と考える。

謝辞

本稿は2019年度早稲田大学特定課題研究助成費「石製祭具の生産体制からみた古墳時代前・中期の社会構造」（課題番号2019C-636）による成果を含む。

また原祐三コレクションおよび旧7号館考古学研究所蔵資料の来歴については、早稲田大学文学学術院・高橋龍三郎教授、井上祐一氏のご教示をいただいた。この場を借りて深謝申し上げます。

註

- (1) このほか、千葉県西之城貝塚の出土品のなかに「周溝貝層石製模造品」と記されたラベルが残っており、本稿報告資料のほかにも石製模造品が収蔵されている可能性がある。西之城貝塚は古墳の下から貝層が検出されており、古墳を断ち割って調査を行った経緯がある（西村 1984）。古墳に伴う石製模造品が存在した可能性は十分に考えられる。ただし既往の報文では当該資料に触れた記載はなく、現在の所在は不明である。また、早稲田大学の調査としてはほかに千葉県古名内中西山遺跡において滑石製の紡錘車・白玉・剣形石製模造品の出土が報告されている（滝口編 1985 p.269）。しかし、当該遺跡の出土品で現在も大学内での所蔵が確認できるものは土器類のみである。
- (2) 原氏の著書ではこのほか、「市川曾谷遺跡発見」と記載された土偶の写真も掲載されている。氏が馬込に在住されていた時にも磨製石斧などの考古資料を収集したほか、市川市国府台において「弥生式土器の大瓶や壺、皿、鍋、土偶など」を収集した旨も記載されている。上記の記述から関東圏での採集の可能性もあるものの、本稿で紹介する刀子形石製模造品への言及はなく、著書の中では氏が幼少期に地元で採集したという打製石斧や「化石」採集の玉類と共に掲載されている。
- (3) 資料についてはほぼ原氏から寄贈をいただいた時のままで、その後は受贈記念の展示が一度行われて以降、整理や移動は殆どなされていないという。本稿報告資料が納められ、「化石」古墳からの出土として原氏から受け取ったというケースについても、受贈時から移動はされていないものと推測される。
- (4) 原祐三コレクションにはこのほか、剣形石製模造品の破片と思しき資料も含まれている。3cm程度の破片で全体形を把握することが困難であり、本稿では紹介を割愛した。
- (5) 清喜 1994 では「確実な情報伝達の手段のひとつとして、雛形のようなものが用いられた可能性」が指摘されている（清喜 1994 p.720 12-13）。遠隔地の古墳間で形態に共通性が見られる例として、清喜 1994・1998などで分析対象とされた富雄丸山古墳と常陸鏡塚古墳はその最たるものであるが、他にも広域の古墳間で形態の共通性がみられることが指摘されている（北山 2003・中川 2002 ほか）。こうした共通性が、石製模造品間の製作情報の伝達によるものなのか、あるいは祖形の刀子そのものの形態に求められるのかは検討すべき課題である。
- (6) 撮影にはサンワダイレクト社のデジタル顕微鏡400-CAM058を用いた。

引用参考文献

- 飯田市教育委員会 2012『飯田古墳群』飯田市教育委員会
飯田市教育委員会 2015『化石遺跡 化石1号古墳』飯田市教育委員会
川西宏幸 1983「中期畿内政権論」『考古学雑誌』第69巻第2号 日本考古学会
河野一隆 1999「石製模造品の登場と埋葬儀礼の変容」『考古学ジャーナル』453 ニュー・サイエンス社
河野一隆 2002「石製模造品」『考古資料大観 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館
河野一隆 2003「石製模造品の編年と儀礼の展開」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11 帝京大学文化財研究所
北山峰生 2002「石製模造品副葬の動向とその意義」『古代学研究』158 古代学研究会
北山峰生 2003「石製模造品生産・流通の一形態」『樫原考古学研究所論集』第14巻 奈良県立樫原考古学研究所
佐久間正明 2009「東国における石製模造品の展開」『日本考古学』27 日本考古学協会
佐久間正明 2011「関東地方における古墳出土石製模造品の製作構造について」『考古学研究』58-2 考古学研究会
佐久間正明 2012「東国における古墳出土袋斧形石製模造品の製作方法と展開」『古代』第127号 早稲田大学考古学会
下伊那誌編集会 1955『下伊那史』2巻下伊那誌編集会
白石太一郎 1985「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第7集 国立歴史民俗博物館
杉山晋作 1985「石製刀子とその用途」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第7集 国立歴史民俗博物館

- 清喜裕二 1994「古墳出土農具形石製模造品の研究—富雄丸山古墳と鏡塚古墳—」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 清喜裕二 1998「初期農具形石製模造品の基礎的研究—大型石製刀子を中心として—」『古代』105号 早稲田大学考古学会
- 清喜裕二 2003「古墳出土石製模造品製作の実態に関する素描」『続文化財学論集刊行会』文化財学論集刊行会
- 清喜裕二 2014「古墳出土石製模造品の製作者と工房について」『大阪市立大学博物館報告書』61
- 第54回埋蔵文化財研究集会事務局編 2005『古墳時代の滑石製品：その生産と消費 発表要旨・資料集』第54回埋蔵文化財研究集会事務局
- 滝口 宏 編 1985『印旛手賀』早稲田大学出版部
- 田中大輔 2007「古墳出土石製模造品の拡散に関する試論」『東京考古』25 東京考古談話会
- 原 祐三 1969「私の収集癖（コレクト・マニア）—道に大いに遺を拾う—」『私の随筆集—かねもちの心がけ』経済新誌社
- 広瀬和雄 1992「畿内における前方後円墳の編年基準」『前方後円墳集成』山川出版社
- 深澤敦仁 2001「群馬県の石製品・石製模造品製作址について」『考古聚英』梅澤重昭先生退官記念論文集刊行会
- 深澤敦仁 2003「石製模造品の生産流通に関する素描—群馬県の事例からのアプローチ—」『考古学に学ぶ』Ⅱ 同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 中井正幸 1993「古墳出土の石製祭器—滑石製農具を中心として—」『考古学雑誌』第79巻第2号 日本考古学会
- 中川敬太 2002「大和と周縁地域における農具形石製模造品の展開」『遡航』第20号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
- 西村正衛 1984『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部

図版出典

- 図1 筆者撮影。
- 図2 原 1969 p.256より転載。
- 図3 筆者実測・撮影。
- 図4 筆者撮影。
- 図5 実測図をもとに筆者作成。